第１回教員の多忙化対策検討委員会　あいさつ

皆さん、こんにちは。教育長の斉木です。委員の皆様方には、ご多忙の中、教員の多忙化対策検討委員会にご出席いただき、誠にありがとうございます。

教員の多忙化改善は、教育の重要課題の一つとして様々な場面で議論されています。働き方改革という言葉も使われますが、新型コロナウイルス感染防止のために学校現場の状況も変化しつつある中で、教員の働き方ということについては、教育の根本に戻って再確認する必要があるのではないかと感じています。

さて私は個人的には、多忙という言葉から、その仕事に充実感を持ち、没頭しているイメージが浮かんできます。少々不謹慎ですが、例年なら出席すべき行事や会議が次々と中止や延期になり、時間を持て余し気味の私は、教育長室の模様替えを４月以来何回もしています。究極の執務室には近づいていますが、仕事に対する充実感という点では今ひとつ物足りなさを感じています。多忙な中で目を輝かせ、テキパキと案件を処理している自分の姿を夢見ているところです。

働き方ということについては、その捉え方は様々です。教員は子どもたちを指導しますが、指導するとは一方的な働きかけではなく、教員が自らの生きる姿勢を示すことでもあります。その姿勢とは生徒の前に立つ時もそうでない時も、そして休日を含め昼夜を問わず日常生活の振る舞い方の全てであると思います。そうであるならば勤務時間とそれ以外の時間との区切りは曖昧になってきます。

学校の教員は、学校生活の多くの場面で自分が指導として行なっている営みについて、〇〇力の育成とか、〇〇する態度の育成などの目的を普段から意識することはあまりないと思います。子どもたちとの何気ないふれあいや気持ちの交流を喜び、何よりも大切にしているのではないでしょうか。毎日の活動そのものの充実を目的にしている、と言ってもいいと思います。だからこそ学校生活の中に喜怒哀楽が生まれます。目的を意識した手段としてだけの毎日だったら感情の高まりはさほどないはずです。

本委員会では多忙化改善のための取り組みについて検討していただくのですが、今後各学校で行われる多忙化改善・働き方改革の取り組みが、その取り組みの結果、学校の先生方がいつの間にか教員としての自らの使命をより深く自覚していた、そうなることを私は願っています。委員、そしてオブザーバーの皆様からはそれぞれのお立場からのご意見はもちろん、様々な視点から自由にご発言いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。なお本日は感染防止のため短い時間設定での議事進行になりますが、ご理解ご協力をお願いします。